

民數紀略

○モーセの第四巻にして猶太人は之をバミダベル（野）と云へど、埃及エジプトを出で第二年に一回、第四十年に一回行はれし民籍調査のことあれば、民数紀と云ふも不適當に非ず。埃及を出で第二年の二月一日の記録より二月二十日にシナイ山下を發し、カデシの荒野に達し、直にカナンカナンの地に入らんとし間牒までも送りしが、其報告は却てイスラエル人を驚かし、モーセ・アロンに反對してエホバの怒りを招き、ホルマに敗北す。而して第四十年にヂンの荒野に於てアロンの死する時までの記事也。其うち兵火のうた（二一章）、泉のうた（二二章）、バラムのうた（二三、二四章）等は文学としても見るべきものなり。三十八年間砂漠をさまよへるものは約束の地を受る準備の爲にして。

第一章

○最も多きはユダ族の七万四千六百人、最も少きはマナ族の三万二千二百人なりき。エフライムとマナセは兄弟にして、マナセは兄なりしが、其父ヨセフの父ヤコブは却てエフライムを祝して、弟は兄よりも大なる者

となりて、其子孫は多くの民となるべしと云へり（創四八章）。

ユダはヤコブガが妻レアによりて生みし第四男。ユダ族は最も強く、荒野を旅せし時もカナンの地に入りし時もユダ族は先鋒たりき。其旗章は獅子にして、黙示録五<sup>5</sup>にユダの支流より出でたる獅子ダビデの根。すでに勝を得たれば、此巻物をひらき、また七つの封印をとくことを得るなりあり。ダビデ王もソロモン王もキリストも其支流より出でたり。

第二章

○ルベン、ユダ、エフライム、ダンの四人の牧伯は旗手なりき。

○神の兵は隊伍齋々其目的を達せんが為に堂々として進み出でたり。

キリスト者もサタンを滅ぼすが為に天國をとらんが為に須く奮闘すべき也。

9 「ユダの營の軍旅すなはち核數られし者は都合十八萬六千四百人是等の者首先に進むべし」

○第一軍

31 「三ダンの營の核數られし者は都合十五萬七千六百人是等の者その旗號にしたがひて最後に進むべし」

○第四軍

## 第三章

○利未記十章参照

4 「四ナダブとアビウはシナイの野にて異火をエホバの前に献たる時にエホバの前に死しねり子なしエレアザルとイタルはその父アロンの目の前にて祭司の職つとめを爲なせり」

○神の祭壇の上に常に燃えつゝありし火を用いずして普通の火を以て香をたき、神にさゝげし過失により神罰を蒙り、火にてやき滅ぼされたり。

6 「六レビの支派わかれを召めしよせ祭司アロンの前に侍はりてこれに事つかへしめよ」

「レビ」

○レビはヤコブの三男也。殊に其族中より祭司のツトメをもてるアロンの一家をのぞき他をレビ人と称せり。

18 「二ハゲルシヨンの子等こどもの名はその宗族やからによれば左の如しリブニ、シメイ」

○アムラム其叔母ヨケベテを娶れり。彼れアロンとオーセを生む（出六16）。

○神はイスラエルの諸族の首出の代りにレビ族を選びて特別に神に仕ふものとなし給へり。

○ヤコブの長子ルベン其弟シメオン過失あり。故に三男レビをえらびたまへり。

○アロンもアムラミ族也。

47 「四七その頭數かしらかずに依よりて一人ごとに五シケルを取とり即ち聖所のシケルすなはに循きまひて之を取べきなり一シケルは二

十ゲラなり」

「一シケル」○五十二銭位

「五シケル」○二円六十銭

「ゲラ」○一ゲラは二銭六り位

50

「五○即ちモーセ、イスラエルの子孫ひとびとの首出子うひごの中より聖所のシケルにしたがひて金かね千三百六十五シケルを取り」  
「千三百六十五シケル」○凡七百円余

第四章

○アロン族は恰も幹部の如し。

○民三17レビの子供の名は左の如し。

ゲルシヨン、コハテ、メラリ

コハテ	2750
ゲルシヨン	2630
メラリ	<u>3200</u>
	8580

5 「五即ち營を進むる時はアロンとその子等こらまづ往て障蔽の幕を取おろし之をもて律法おきての櫃はこを覆おほひ」

○聖所と至聖所との間にある幕也。

6 「六その上に獾まみの皮の蓋おほひをほどこしまたその上に總青せうあをの布うちを打かけその杠さへを差さしいるべし」

「獾の皮の蓋をほどこし」○マミの皮にて蓋ふは損せず、又雨をふせぐ。

11 「二また金の壇の上に青き布を打かけ獾の皮の蓋をもて之を蓋ひその杠さへを差さしいるべし」

○金の香壇なり

13 「三また壇の灰を取さりて紫の布をその壇に打かけ」

○燔祭壇也。

16 「二六祭司アロンの子エレアザルは燈火ともしびの油馨かうばしき香常供じようぐの素祭そさいおよび灌膏そそぎを司どりまた幕屋の全體とその中なる一切の聖物せいぶつおよび其處そこの諸もろもろの器具うつわを司どるべし」

「エレアゼル」○三男

18 「二八汝等コハテ人の宗族やからの者をしてレビ人の中うちより絶たるるに至いたらしむる勿なかれ」

○注意してコハテ人が神意にそむかざる様にせよ。

28 「二八ゲルシヨンの子孫しそんの宗族やからが集會の幕屋において爲なすべき動作はたらきは是かくのごとし彼等の守る所は祭司アロンの子イタマルこれを監督つかさどるべし」

「イタマル」○四男

○スベテノ規則甚ダ面倒ナリシガ又能ク嚴肅ニシテ整頓セルコト驚クベキモノアリキ。

第五章

2 「イスラエルの子孫に命じて癩病人と流出ある者と死骸に汚されたる者とを盡く營の外に出さしめよ」

○死骸にさわりし者は其身汚るとなす日本の古俗に似たり。

〔流出〕 ○ウミ、經水等

6 「イスラエルの子孫に告よ男または女もし人の犯す罪を犯してエホバに悖りその身罪ある者とならば」

○人より物をあづかり又は奪ひ、又は捨ヒロウ等して然らずと云ふ也。

9 「イスラエルの子孫の擧祭となして祭司に携へ來る所の聖物は皆祭司に歸す」

○麦粉の菓子煎餅等をエホバの前にさしあげてそなえ、後祭司にわたす。

15 「五夫その妻を祭司の許に携へきたり大麥の粉一エバの十分の一をこれがために禮物として持きたるべしその

上に油を灌べからずまた乳香を加ふべからず是は猜疑の禮物記念の禮物にして罪を誌えしむる者なればなり」

〔一エバ〕 ○一斗三升六合？



## 第六章

○第六章の誓願につきては、日本に行はるゝ「願がけ」に甚だ似たり。而して多くは其の期間に齋戒を守るをつねとし、其願ひの叶ひたる時は願ばたしと称して捧惣をなすを常とす。

○ヤコブはベテルにて神彼を守り安全に父の家に帰ることを得せしめば、立てたる石の柱を神の家とし、其所得の十部分の一を献げんとちかひ（創二八20以下）。

○エフタはアンモン人に勝つことを得ば、燔祭を捧げんと云ひ（士一一30）。

○ハンナ（サムエルの母）は男子を授け給はば一生剃刀を用ひずと。日本に於ても上古探湯によりて正邪眞偽を判ぜしことあり。日本書紀應神天皇の條に武内宿弥甘美内の宿弥に勝ちしこと允恭天皇これによりて氏姓を定められしこと等あり。

2 「<sup>ひしほじ</sup>イスラエルの子孫に告て之に言へ<sup>をこし</sup>男または<sup>をんなぞく</sup>女俗を離れてナザレ人の誓願を立て俗を離れてその身をエホバに歸せしむる時は」

「ナザレ人」○時或は生涯の禁欲生活をなせるものにして、神に身を捧げし者の意也（士師一三四以下）。

5 「<sup>あひだ</sup>その誓願を立て俗を離れる日の間は<sup>すべ</sup>都て<sup>かみそり</sup>剃刀をその頭に<sup>かうべ</sup>あつべからずその俗を離れて身をエホバに歸せしめたる日の満るまで<sup>みづ</sup>彼は<sup>きよ</sup>聖ければその頭髮を<sup>かみのけ</sup>長しおくべし」

○彼（ポーロ）ケンクレアにありし時、誓願によりて髪を剃れり（徒一八18、二二23〜24）。

11 「二」斯て祭司はその一を罪祭ざいさいに一を燔祭はんさいに献げ彼が屍しかばねに由て獲たる罪を贖ひまたその日にかれの首かうべを聖潔きよくすべし」

〔罪祭〕 ○知らずして犯せる罪を許されんが為に献ぐる犠牲也。

〔燔祭〕 ○献者自ら其身を神に献ぐる意にして、其犠牲をやきて捧ぐる也（羅二一1、2）。

12 「三」彼またその俗を離れてエホバに歸するの日を新あらたにし當歳とうさいの羔羊このつひを携へきたりて愆祭げんさいとなすべし彼その俗を離れる時に身を汚よごしたれば是より前の日はその中に算かぞふべからざるなり」

〔愆祭〕

○人に損害を及ぼしたる時には、其五分の一を加へて償還し、且つ牡羊を神に捧げて其罪の許しを乞う也。

14 「四」斯てその人は禮物そなへものをエホバにささぐべし即ち當歳とうさいの羔羊このつひの牡をすの全き者一匹を燔祭となし當歳とうさいの羔羊このつひの牡をすの全き者一匹を罪祭となし牡羊をひつじの全き者一匹を酬恩祭しうおんさいとなし」

〔酬恩祭〕

○願ばたし等感謝して神と和ぐの意にして、脂のみ祭壇にそなへてやき、胸の肉と右肩の肉を祭司に携へ行き、燔祭としてささぐべし、餘れるを献者自ら家族友人などと聖所の前に於て食ふ。

15 「五」また無酵たねいれぬパンひじかごむぎこ一筐まじへ麥粉あねに油あぶらを和まじて作れる菓子油たねを塗ぬり煎餅せんべいおよびその素祭もとまつりと灌祭かんまつりの物ものを持もちきたるべし」

〔素祭〕

○燔祭に伴ふて献ぐるものにて、人の勤勞事業を神にささぐる意にて、麥粉より作りたるパン煎餅等なり。

17 「<sup>一七</sup>またその牡羊をひつじを筐かこの中なる酔いれぬパンとあはせこれを酬恩祭いけにへの犠牲としエホバに献ぐべし祭司またその

素祭と灌祭をも献ぐべきなり」

〔灌祭〕○ブドー酒を以て素祭に加へて火祭にそゞぎて供ふる也。

24 26 「<sup>二四</sup>願くはエホバ汝を恵み汝を守りたまへ <sup>二五</sup>願くはエホバその面かほをもて汝を照し汝を憐みたまへ <sup>二六</sup>願くはエホバその面を擧て汝を眷かへりみ汝に平安を賜たまへと」

○三重の祈祷の言葉

第七章

○ゲルシオン、メラリの族は重くして嵩ばりたるものを運ぶが故に車及牛を要したりしが、コハテ族は尊くして少なるものを運ぶが故に之を要せざりしなり。神に奉仕するは一なれども其形に於ては種々あり（羅一二六以下参照）。

13 「二三その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふ此二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す」

「シケル」○四匁三分六厘余

「百三十シケル」○凡五百六十七匁

「七十シケル」○三百五匁

14 「一四また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す」

「十シケル」○凡四十四匁

85 「八五銀の皿は各々百三十シケル鉢は各々七十シケル聖所のシケルに依ばこの諸の銀の器はその重都合二千四百シケルなりき」

「二千四百シケル」○十メ四百六十四匁

86 「八六また香を充せる金の匙十二ありその重は聖所のシケルに依ば各々十シケルその匙の金は都合百二十シケル

なりき

〔百二十シケル〕○五百二十三匁余

第八章

7

「<sup>七</sup>汝かく彼らに爲て之を潔むべし即ち罪を潔むる水を彼等に灑ぎかけ彼等にその身をことごとく剃しめその衣服を洗はしめて之を潔め」

○頭の毛と髯と眉とを尽く剃り。

第一〇章

21 「二コハテ人聖所（びとけいせいしよ）を擔（た）ひて進（しん）めり是（こゝ）が至（いた）るまでに彼（か）その幕屋（たて）を建（た）てはる」

「彼ら」〇十七節にあるメラリの子孫

31 「三モーセまた言（い）けるは請（こ）ふ我等（われら）を棄（す）去（る）なかれ汝（われ）は我儕（われら）が曠野（あれの）に營（えい）を張（は）るを（し）れば願（ねが）くは我儕（われら）の目（め）となれ」

〇めしひの目となり、あしなへの足となる。

思ふにホバブはすでに年老ひ且つ種々の経験にとみたるなるべし。

33 「三三斯（い）て彼等エホバの山（い）を（い）で（い）て三日路（み）ほど進（しん）み行（い）りエホバの契約（けい）の櫃（こ）その三日路（み）の間（ま）かれらに先（ま）だち行（い）て

彼等の休息所（やすみどころ）を尋（もと）ね覓（もと）めたり」

「エホバの山」〇ホレブの山

34 「三四彼等營（えい）を出（で）て途（みち）に進（しん）むに當（あた）りて晝（ひる）はエホバの雲（う）かれらの上（う）にありき」

〇雲の止まる所に止まる為也。

36 「三六またその止（とど）まる時（とき）は言（い）ひエホバよ千（ち）萬（ま）のイスラエル人（びと）に歸（か）りたまへ」

〇之を守り給へ

第一章

- 1 「茲こゝにに民災難わざわひに罹かれる者のごとくにエホバの耳みみに眩くらきぬエホバその怨言つぶやきを聞きて震怒いかりを發はつしたまひければエホバの火かれらに向ひて燃もいでその營めいの極端はしを燒やけ」
- 4 「彼等砂漠の道を進むことの困難なるを見て種々のつぶやきの言を發せり。  
 「四茲に彼等の中なる衆多の寄集人等慾心よりあつまりひしもよくしんを起すイスラエルの子孫ひとびともまた再び哭なきて言ことふ誰か我らに肉あたを與あたへて食はしめんか」
- 6 「埃エジプト及より従ひ或は途中より従ひ來りし者、世に信者ならずして信者につき従ひ來る者あり。  
 「六然るに今は我儕の精神枯衰かれせろふ我らの目の前にはこのマナの外ほか何あらも有あるなりと」
- 7 「七マナは芫荽いはきの實みのごとくにしてその色はブドラクの色のごとし」  
 「芫荽」○繖形科、その実みは麻の実の如し。  
 「ブドラクの色のごとし」○白きゴムの滴のごとき白色なり。  
 「ブドラク」○ゴムの一種
- 11 「二モーセすなはちエホバに言いけるは汝おれなんぞ僕あしを惡あしくしたまふ乎やいかなれば我汝の前に恩めぐみを獲えずして汝かく此すべての民をわが任にとなして我に負おせたまふや」  
 ○モーセの悲しき祈り。モーセは其責任即ち十字架の重きに過ぐるを訴へたり。



21 「二三 モーセ言けるは我が偕ともにをる民は歩卒ほそつのみにても六十萬あり然るに汝は我かれらに肉を興あたへて一月の間食しめんと言たまふ」

○神に能はざることなし。恰もイエスが五つの麵包を以て五千人を養へるが如し。されど多くの人はモーセと同じく之を疑ふなり。神の人モーセも之をイエスに比してはるかに劣れるを見るなり。

26 「二六 時に彼等の中なる二人の者營えいに止まり居るその一人の名はエルダデといひ一人の名はメダデと曰いふ靈またかれらの上にもやどれり彼らは其名を録しるされたる者なりしが幕屋に往ゆかざりければ營の中にて預言をなせり」

○彼らはエホバの前に出づることを叩ひかへたり。

病氣か何かににてありしなるべし。

豫言は神の意を悟りて之を語ることも也。

31 「三 茲にエホバの許より風おこり出て海の方より鶉うづらを吹きたりこれをして營の周圍まはりに墮おちしめたりその墮おちひろがれること營の四周まわり此旁こなたも大約一日路彼旁おほねいちにちも大約一日路地の表より高きこと大約二キュビトなりき」

「二キュビト」○三尺余

32 「三三 民すなはち起たちあがりてその日終日その夜終夜またその次の日終日鶉うづらを拾あつひ斂あつめけるが拾あつひ斂あつむることの至いたつて寡すくなき者も十ホメルほど拾あつひ斂あつめたり皆これを營の周圍まはりに陳ならべおけり」

「ホメル」○一ホメルは一石三斗六升

33 「三三 肉なほ齒のあひだにありていまだ食くつくさざるにエホバ民にむかひて怒はつを發しこれを撃うちておほいに滅うぼしたまへり」

○神の力は大き也。

エホバは彼等の願を叶へ給ひしかど、そのたましひをやせしめ給へり（詩一〇六15）。  
○神の与へ給ふものに満足すべし。妄りに不平不満を抱くべからず。

第二章

1 「モーセはエテオピアの女を娶りたりしがそのエテオピアの女を娶りしをもてミリアムとアロン、モーセを誇り」

「ミリアム」○モーセの姉にしてアロンより九才、モーセより十二才長ぜり。

「クシの女」○モーセの妻クシ族、チツポラ（出二二）。

2 「彼等すなはち言けるはエホバただモーセによりてのみ語りたまはんやまた我等によりても語り給ふにあらずやとエホバこれを聞たまへり」

○此そしりはミリアムの首唱なりしなるべし。

6 「<sup>六</sup>之に言たまはく汝等わが言を聴け汝らの中にもし預言者あらば我エホバ異象において我をこれに知しめまた夢において之と語らん」

○此そしりに對してモーセは黙せり。神代りて答へたまへり。

7 「<sup>七</sup>わが僕モーセに於ては然らず彼はわが家に忠義なる者なり」

○モーセは豫言者の上の豫言者也。モーセは神の明かなる臨在のうちに常に親しく交はれり。

○正しき人をねたみ恨う行ひはまさに癩病たるべきけがれたる行為也。

アロンの癩病とならざりしは祭司のつとめを顧りたまへるなるべし。

13 「<sup>三</sup>モーセすなはちエホバに呼はりて言ふ嗚呼神よ願くは彼を醫したまへ」

○柔和なるモーセは不快をわすれてとりなしをなせり。

14 「<sup>四</sup>エホバ、モーセに言たまひけるは彼の父その面<sup>かお</sup>に唾する事ありてすら彼は七日の間<sup>はち</sup>羞<sup>はぢ</sup>をるべきに非ずや然ば

七日の間かれを營の外に禁鎖<sup>とぢめ</sup>おきて然る後に歸<sup>かへ</sup>り入<sup>いら</sup>しむべしと」

○父に唾せられてすら羞ぢ居るならば、まして神に打たれたる彼は羞ぢ居るべきに非ずやと。

15 「<sup>五</sup>ミリアムはすなはち七日の間營の外に禁鎖<sup>とぢめ</sup>られぬ民はミリアムの歸り入るまで途<sup>みち</sup>に進まざりき」

○ミリアム一人の為に全軍七日間進まざりしなり。

第三章

○カナンの偵察

偵察者は先づ死海よりヨルダンに沿ふて北に上り、それより又西方をへて南に下りしならん。

17 「<sup>七</sup>モーセかれらを遣はしてカナンの地を窺はしめんとして之に言けるは汝等その南の方に赴きて山に登り」

「山地」○セイル山

21 「<sup>三</sup>是において彼等上りゆきてその地を窺ひチンの曠野よりレホブにおよべり是はハマテに近し」

「レホブ」○カナンの北方にしてベテレホブとも云ふ。死海の北約五十哩。

30 「<sup>三〇</sup>時にカルブ、モーセの前に民を靜めて言けるは我等直に上りゆきて之を攻取ん我等は必ずこれに勝ことを得ん」

「カルブ」○信仰ある勇者也。

32 「<sup>三二</sup>彼等すなはちその窺ひたりし地の事をイスラエルの子孫の中に悪く言ふらして云く我等が行巡りて窺ひたる地は其中に住む者を吞ほるぼす地なり且またその中に我等が見し民はみな身幹たかき人なりし」

○氣候あしく到底五〇人の生活し得ざる地なりと云ふなり。

33 「<sup>三三</sup>我等またアナクの子ネピリムを彼處に見たり是ネピリムより出たる者なり我儕は自ら見るに蝗のごとくまた彼らにも然見なされたり」

○ネピリムは巨男也。臆病風にさそわれて自らやせいなきに比す、笑ふべし。

第一章

○彼等は今日まで旅行の困難をつぶやきたり。今や其目的地の善からざるをきゝて大に失望せり。コロンプスの似たる所あり。

14 「<sup>四</sup>また之をこの地に<sup>すめ</sup>住る民に<sup>つげ</sup>告たりまた彼等は汝エホバがこの民の中に<sup>いま</sup>在し汝エホバが明かにこれに<sup>あらは</sup>顯れたまふことを聞きまたその上に汝の雲をりて汝が<sup>ひる</sup>晝は雲の柱の中にあり夜は火の柱の中にありて之が前に行たまふを<sup>き</sup>聞り」

「この地」○アラビヤ地方

15 「<sup>五</sup>然ば汝もしこの民を一人のごとくに殺したまはば汝の名聲を<sup>きけ</sup>聞る國人等言ん」

「一人のごとくに」○容易く

17 「<sup>七</sup>吾主ねがはくは今汝の<sup>ちから</sup>權能を大ならしめて汝の言たまへる<sup>いひ</sup>如したまへ」

「汝の言たまへる如したまへ」○汝の言たまへる如したまへ<sup>いひ</sup>ち

20 「<sup>二〇</sup>エホバ言たまはく我汝の言にしたがひて之を<sup>ゆる</sup>赦す」

「赦す」○今直に罰せずの意也

25 「<sup>二五</sup>アマレキ人とカナン人谷にをれば明日汝等身を<sup>めぐる</sup>轉して紅海の路より<sup>みち</sup>曠野に<sup>しりぞ</sup>退くべし」

○事を為すに機会あり。船の港を出づるは満潮に乗ずるが如し。今イスラエル人皆躊躇す。機會はすでに去れ

り。退却せざるべからず。

28 「<sup>二</sup>八彼等に言へエホバ曰ふ我は活く汝等が我耳に言しごとく我汝等になすべし」

○此のあれ野に死なば善からんものを（民一四<sup>二</sup>）。

31 「<sup>三</sup>汝等が掠められんと言たりし汝等の子女等を我導きて入ん彼等は汝らが顧みざるところの地を知に至るべし」

○其うちに住む者をのみほろぼす地なり（民一三<sup>32</sup>）。

天国を待望しつゝ此世をかへりみ、此世の快樂をしたひて天国を重んぜるが如し（民一参照）。

「汝等が掠められんと言たりし」○汝等は恐るゝを要せず、汝等が掠められんと言たりし。

34 「<sup>三四</sup>汝らはかの地を窺ふに日數四十日を経たれば其一日を一年として汝等四十年の間その罪を任ひ我が汝らを離たるを知べし」

○神に捨てらるゝ者とならざる様注意せざるべからず。

37 「<sup>三七</sup>即ちその地を悪く言なしたるかの人々は罰をうけてエホバの前に死り」

○人をつまづかしむるべからず。

40 「<sup>四〇</sup>朝蚤く起いでて山の嶺に登りて言ふ視よ我儕此にあり率エホバの約束したまひし地に上りゆかん我等罪を犯したればなり」

○其志やよし。されど神在さざるを如何にせん。

凡てのこと人力のみを以ては如何ともすべからず。

「山」○セイル山



43

「<sup>四三</sup>アマレキ人とカナン人其處に汝らの前にあれば汝等は劍に斃るるならん汝らエホバに遵はざりし故にエホバ汝等と偕に在さざるべしと」

○汝等は地の塩也。塩若し其味を失はゞ何を以て元の味にかへさん。

○神に捨てらるゝ者となる勿れ。神の國に入り得ざる者となる勿れ。

第一章

○汝等愛せらるゝ子供の如く神にならふべし。また愛を以て行ひ、キリストの我等を愛し我等に代りて己をそなへものとなし、犠牲となして神の前にかうばしき香あらしめんとてさゝげ給ひしが如くすべし。(弗五 1 5)

4 5 「四五その禮物をエホバに献る者もし羔羊をもて燔祭あるひは犠牲となすならば麥粉十分の一に油一ヒンの四分の一を混和たるをその素祭として供へ酒一ヒンの四分の一をその灌祭として供ふべし」

「一ヒン」○一升八合五勺

31 「三斯る人はエホバの言を軽んじその誠命を破るなるが故に必ず絶れその罪を身に承ん」

○罪の償は死なり。旧約と新約と異なる所

第一章

○コラ、ダタン、アビラム其他アロンに逆ひて幕屋に香りをたかんとして罰せられたり。

1 「茲こゝにレビの子コハテの子イツハルの子なるコラおよびルベンの子等こどもなるエリアブの子ダタンとアビラム並にペレテの子オン等相結び」

○コハテはモーセ等の祖父なり。

イツハルはモーセ等の父アムラムの弟なれば、コラはモーセ等の従兄弟なり。コラは父の弟ウジエルの子エリザパンがコハテ人の族長たりしことにも不平なりしなるべし（出六30）。

またルベンはやコブの長子なるに、弟レビ族のモーセ曾長となり、又ユダ族の榮えゆくを見てねたみを發せしなり。

3 「三すなはち彼等集りてモーセとアロンに逆さかひ之に言けるは汝らはその分を超こゆ會衆くわいしゅうみな盡つくく聖者せいじやとなりてエホバその中に在いますなるに汝ら尚エホバの會衆の上に立つや」

○汝等は我に對して祭司の国となり聖き民となるべし（出一九6）。

平等のうちにも差別あり、差別の中にも平等あり。

6 「六汝等かく爲せよコラとその黨類ともがらよ汝等みな火盤ひざらを取り」

○アロンと同じく祭司となり、神に近かんとせる故に香を焚かしむる也。

9 「イスラエルの神汝らをイスラエルの會衆の中より分ち己に近かせてエホバの幕屋の役事を爲しめ會衆の前に立て之にはりて勤務をなさしめたまふ是めに汝らにとりて小き事ならんや」

○レビ人を取りてイスラエルの子孫の中なるもろもろの首出子に代え：レビ人は我がものとならん（民三二41、45）。

13 「三汝は乳と蜜との流るる地より我らを導き出して曠野に我らを殺さんとす是めに小き事ならんや然るに汝また我等の上に君たらんとす」

○モーセとシーザーやナポレオンと異なる所一は野心、一は神意のまゝ。

社會主義と云ひ無政府主義と云ひ過激思想と云ふとも、其統率者、其先導者は必要なるべし。

28 「二八モーセやがて言けるは汝等エホバがこの諸の事をなさんとて我を遣したまへる事また我がこれを自分の心にしたがひて行ふにあらざる事を是によりて知べし」

○すべて神の旨によりて行ふを云ふ。

41 「四一その翌日イスラエルの子孫の會衆みなモーセとアロンにむかひて吹き汝等はエホバの民を殺せりと言ひ」

○コラやダタンやアビラムの滅ぼされしを見れば、皆おそれつゝしむべきに、猶其事によりてモーセとアロンに敵する者を生ぜり。

今日の政党の争ひの如し。何れの日か其争闘やまんや。

46 「四六斯てモーセ、アロンに言けるは汝火盤を執り壇の火を之にいれ香をその上に盛て速かにこれを會衆の中に持ちゆき之がために贖罪を爲せ其はエホバ震怒を發したまひて疫病すでに始りたればなり」と」

○モーセ又己に敵する者の贖ひをなせり。

反逆しイエスに對するユダ夫妻と、親と子と、友と友と、主人と僕と、欺すべきかな！

第一章

○幕屋を移す時はレビ人之をとりくづし、幕屋を立つる時はレビ人之を組立つべし。外人の之に近づく者は殺さるべし（民一51）。

レビ人は律法の幕屋をあづかり守るべし（民一53）。

1 「<sup>かく</sup>斯てエホバ、アロンに告て言たまはく汝と汝の子等および汝の父祖の家<sup>きよめ</sup>の者は 聖所に關れる罪をその身に擔當べしまた汝と汝の子等は汝らがその祭司の職について獲ところの罪をその身に擔當べし」

「罪」○一切の責任

2 「<sup>わか</sup>汝また汝の兄弟たるレビの支派の者すなはち汝の父祖の支派の者等をも率て汝に合せしめ汝に事しむべし但し汝と汝の子等は律法の幕屋の前に侍るべきなり」

○祭司たる者はアロンと其子等に限らる。

3 「<sup>つとめ</sup>彼らは汝の職守と聖所の職守とを守るべし只聖所の器具と壇とに近くべからず恐くは彼等も汝等も死るならん」

○幕屋を立てたりはこびたりする事。

アロンの子孫ならざる外人が近よりてエホバの前に香をたくこと（民一六40）。

6 「<sup>ひと</sup>視よ我なんぢらの兄弟たるレビ人をイスラエルの子孫の中より取りエホバのために之を賜物として汝らに賜

ふて集會の幕屋の役事を爲しむ」

○汝レビ人をアロンと其子等に与ふべし。イスラエルの子孫のうちより彼等は全くアロンに与へられたるものなり（民三九）。

「なんぢ」○アロン

「汝ら」○アロンと其子等

7 「七」汝と汝の子等は祭司の職を守りて祭壇の上と障蔽の幕の内の一切の事を執おこなひ斯ともに勤むべし我祭司の職の勤務と賜物として汝らに賜ふ外人の近く者は殺されん」

「障蔽の幕」

○聖所と至聖所との間に在る幕也。至聖所には契約の箱あり。幕の外即ち聖所に香、パンの臺燈臺等あり。

8 「八」エホバ又アロンに言たまはく我イスラエルの子孫の諸の聖禮物の中我に擧祭とするところの者をもて汝に賜ひて得さす即ち我これを汝と汝の子等にあたへてその分となさしめ是を永く例となす」

○日本に於ても神社にそなへたる物が神官の収入となるが如し。

9 「九」斯のごとく至聖禮物の中火にて燒ざる者は汝に歸すべし即ちその我に献る諸の禮物素祭罪祭懲祭等みな至聖くして汝と汝らの子等に歸すべし」

○民六章参照。

11 「二」汝に歸すべき物は是なり即ちイスラエルの子孫の献る擧祭と搖祭の物我これを汝と汝の男子と女子に與へ是を永く例となす汝の家の者の中潔き者はみな之を食ふことを得るなり」

○癩病の如き者は汚れたる者也。

15 「五凡そ血肉ある者の首出子にしてエホバに献らるる者は人にもあれ畜にもあれ皆なんちに歸すべし但し人の首出子は必ず贖ふべくまた汚れたる畜獣の首出子も贖ふべきなり」

「汚れたる畜獸」○ロバの如き。

16 「六之を贖ふにはその人の生れて一箇月に至れる後に汝その估價に依り聖所のシケルに循ひて銀五シケルに之を贖ふべし一シケルはすなはち二十ゲラなり」

「シケル」○一シケル五十二錢。

「五シケル」○二円六十錢。

「ゲラ」○一ゲラ二錢六り位。

19 「九イスラエルの子孫がエホバに献て擧祭とする所の聖物はみな我これを汝と汝の男子女子に與へこれを永く例となす是はエホバの前において汝と汝の子孫に對する鹽の契約にして變らざる者なり」

○汝素祭献ぐるには凡て塩を以て之に味つくべし。汝の神の契約の塩を汝の素祭にくことなかれ(利二13)。  
 21 「二またレビの子孫たる者には我イスラエルの中において物の十分の一を與へて之が産業となし其なすとことろの役事すなはち集會の幕屋の役事に報ゆ」

○レビ族の受くべき報酬。日本に於ても弓弭のみつぎ手末のみつぎなどありしが如し。

十一族より其收穫の十分の一づゝをさゝぐるを以てレビ族の得るところは他族の人々の收入と略同一なり。

27 「七汝等の擧祭の物品は禾場よりたてまつる穀物の如く酒酔の内よりたてまつる酒のごとくに見做れん」



〔禾場よりたてまつる穀物〕○初穂の事也。

30

〔三〇〕汝かく彼等に言べし汝らその中より嘉ところを取て献るに於てはその殘餘の物は汝等レビ人におけること  
禾場より取る物のごとく酒酔より取る物のごとくならん〕

〔汝〕○モーゼ。

32

〔三一〕汝らその嘉ところを献るに於ては之がために罪を負こと有じ汝らはイスラエルの子孫の聖別て献る物を汚  
すべからず恐くは汝ら死ん〕

○神にさゝぐるには最もよきものをさゝぐべし。

## 第一章

○若しケガレにそゞぎて牛及び羊の血、また焚ける若きメウシの灰など肉体をきよむることを得ば、ましてかぎりなき靈により、キズなくして己れを神に獻げしキリストの血は、汝等に活ける神をまつらせんが為め死の行を去らしめて其心をきよむることをせざらんや（來九13〜14）。

3 「三汝ら之を祭司エレアザルに交すべし彼はまたこれを營の外に牽いだして自己の眼の前にこれを幸らしむべし」

「エレアザル」○アロンの第三子

7〜10 「七かくて祭司はその衣服を洗ひ水にてその身を滌ぎて然る後營に入れし祭司の身は晩まで汚るるなり 八ま

た之を焼たる者も水にその衣服を洗ひ水にその身を滌ぐべし彼も晩まで汚るるなり 九斯て身の潔き人一人その牝牛の灰をかき斂めてこれを營の外の清淨處に蓄へ置べし是イスラエルの子孫の會衆のために備へおきて汚穢を潔る水を作るべき者にして罪を潔むる物に當るなり 一〇その牝牛の灰をかき斂めたる者はその衣服を洗ふべしその身は晩まで汚るるなりイスラエルの子孫とその中に寄寓る他國の人とは永くこれを例とすべきなり」

○人をきよむる為には己が身のけがるゝをも厭ふべからず。

17 「七汚れたる者ある時はかの罪を潔むる者たる焼る牝牛の灰をとりて器に入れ活水を之に加ふべし」

「活水」○湧出づる水なり。井水も亦活ける水の一也。

第二〇章

1 「斯てイスラエルの子孫ひとびとの全會衆ぜんくわいしう正月におよびてチンの曠野あらのにいたれり而して民みなカデシとしまに止りけるがミ

リアムそこ其處にて死たれば之を其處に葬りぬ」

○エジプトを出で三年目。

「ミリアム」

○モーセ、アロンの姉にして年百三十二才。モーセ時に百二十才。アロン時に百二十三才なりき。

8 「汝ぶたうらなんぞ我らをエジプトより上のぼらしめてこの惡あしき處に導きいりしや此には種まぐを播まべき處なく無花果いちじくもなく

葡萄ぶたうもなく石榴ざくみも無くまた飲のみべき水も無し」

○かつてパロの前に不思議をあらはし、又は紅海をうちしモーセの杖に非ず。アロンの杖にして芽を出し、花

をひらき、巴旦香の果を結びし杖なり（出一七五）。

10 「<sup>二</sup>○アロンとともに會衆いはいを磐いはの前に集めて之に言けるは汝らそむくものども 背反者等よ聽け我等水をしてこの磐より汝らのた

めに出いだしめん歟かと」

○神は杖を以て岩を打てと命じ給はざりき。

モーセ又榮光を神に帰せずして、如何にも己等の力の如く振舞ひたり。又必ず出づと云はず疑ひの意を含め

り。これ不信の罪を犯せる也。神の人モーセにも此過失あり。而して神は其罪を許し給はざりき。罪の許し

は只キリストに由るの時感謝すべきかな主イエスよ！

12 「二時にエホバ、モーセとアロンに言たまひけるは汝等は我を信ぜずしてイスラエルの子孫の目の前に我の聖を顯さざりしによりてこの會衆をわが之に興へし地に導きいることを得じと」

○ヘロデ榮光を神に帰せざるにより、主の使直に彼をうちしかば、彼は虫の爲めに噬まれて息たゆ(徒一二23)。

14 「四茲にモーセ、カデシより使者をエドムの王に遣して言けるは汝の兄弟イスラエルかく言ふ汝はわれらが遭し諸の艱難を知る」

○エドム人はヤコブの兄エサウの子孫なり。

17 「七願くは我らをして汝の國を通過しめよ我等は田畝をも葡萄園をも通過じまた井の水をも飲じ我らは第王の路を通過り汝の境をいづるまでは右にも左にもまがらじ」

〔王の路〕○国道也。最もひろき街道也。

22 「三かくてイスラエルの子孫の會衆みなカデシより進みてホル山にいたれり」

〔ホル山〕○地中海面上四千八百尺。死海の海面上六千尺の山也。

23 「三エホバ、エドムの國の境なるホル山にてモーセとアロンに告て言たまはく」

○人若しつとめをなさば、神の賜のちからと思ひてつとめをなすべし。是れイエスキリストによりて事毎に神に榮えの帰せん為なり(彼前四11)。

○子供が双六をなす如し、「上り」そうで中々上れぬのである。

## 第二章

2 3 「是においてイスラエル誓願をエホバに立て言ふ汝もしこの民をわが手に付したまはば我その城邑を盡

く滅さんと<sup>三</sup>エホバすなはちイスラエルの言を聽いれてカナン人を付したまひければ之とその城邑をことごとく滅せり是をもてその處の名をホルマ(殲滅)と呼なしたり」

○カナン人もエホバの物なり。

4 「四民はホル山より進みゆき紅海の途よりしてエドムを繞り通らんとせしがその途のために民心を苦めたり」

○以前はエドムの西を通り、今度はその東を通らんとす。

5 「五すなはち民神とモーセにむかいて<sup>つぶや</sup>呔きけるは汝等なんぞ我らをエジプトより導きのぼりて曠野に死しめんとするや此には食物も無くまた水も無し我等はこの粗き食物を心に厭ふなりと」

○尊き食物のマナも彼等は神の恵に馴れて、之を厭ふに至れり。

6 「是をもてエバホ火の蛇を民の中に遣して民を咬しめたまひければイスラエルの民の中死者多かりき」

○大の蛇は毒蛇なり。其咬む所となれば恐ろしき<sup>(えんしやう)</sup>□ □を起してその傷口は焼くが如し。故に火の蛇と云ふなり。

7 「七是によりて民モーセにいたりて言けるは我らエホバと汝にむかひて呔きて罪を獲たり請ふ汝エホバに祈りて蛇を我等より取はなさしめよとモーセすなはち民のために祈ければ」

○幾度も同じ過失をくりかえすは普通の人情也。

8 「アエホバ、モーセに言たまひけるは汝蛇を作りてこれを杆さその上に載のせおくべし凡すべて咬かれたる者は之を仰みぎ觀みなば生いべし」

○モーセ野に蛇をあげし如く、人の子もあげらるべし。凡て之を信ずる者に亡ぶることなくして永世を受けしめんが為なり（約ヨハ三14）。

十字架上のイエスを仰ぐべし。

12 「三また其處より進みゆきてゼレデの谷に營を張り」

「ゼレデ」○死海に注ぐ川の名なり。

13 「三其處より進みゆきてアルノンの彼旁かなたに營を張りアルノンはアモリの境さかひより出て曠野に流るる者にてモアブとアモリさかひの間にありてモアブの界さかひをなすなり」

○やうやく死海の東にちかづく。

アモリはアモリ族の住む地。

「アルノン」○死海に注ぐ川の名なり。

14 「四故にエホバの戦争いくさの記いへに言るあり云くスバのワヘブ、アルノンの河」

「戦争の記」○何を指すや不明也。

17 「七時にイスラエルこの歌を歌へり云く井の水みどよ湧あがれ汝等これがために歌へよ」

○井の歌ベエルには以前井ありたれども涸れたれば、イスラエル協力して之を修繕せるなるべし。

21 「三かくてイスラエル使者つかひをアモリ人ひとの王シホンに遣いひて言しめけるは」

「アモリ人」○東方○アモリ人南にあり。モアブ其北にあり。アンモンは又其北に在り。

24 「二四イスラエル刃やいばをもて之を撃うちやぶりその地をアルノンよりヤボクまで奪ひ取りアンモンの子孫ひとびとにまで至れりアンモンの子孫の境界さかひは堅固かたなりき」

「ヤボク川」○ギレアドの山より起り西に流れ、ガリラヤの湖と死海の中央にてヨルダン川に入る。

「アンモン」○アモリ人とアンモン人とは異れり。アンモン人はアモリ人より北方に住めり。

27 30 「<sup>二七</sup>故に歌をもて云るあり曰く汝らヘシボンに來れシホンの城邑みやこを築き建よ <sup>二八</sup>ヘシボンより火出いでシホンの都城ほのほより焔ほのほいでてモアブのアルを焚やきつくしアルノンの邊ほとりの高處たかみを占しむる君王きみたち等を滅ほせり <sup>二九</sup>モアブよ汝は禍わざわひなる哉ケモシの民よ汝は滅ほさるその男子は逃奔にげはしりその女子はアモリ人の王シホンに擄とらはるるなり 三〇

我等は彼らを撃たふしヘシボンを滅ぼしてデボンに及び之を荒してまたノパに及びメデバにいたる」

○アモリ人の誇りの歌。

此モアブ人を撃破したるアモリ人も今やイスラエル人に打破られたり。

三十節以下はイスラエル自ら歌う也。

27 「<sup>二七</sup>故に歌をもて云るあり曰く汝らヘシボンに來れシホンの城邑みやこを築き建よ」

「汝ら」○汝ら人々よ

29 「<sup>二九</sup>モアブよ汝は禍わざわひなる哉ケモシの民よ汝は滅ほさるその男子は逃奔にげはしりその女子はアモリ人の王シホンに擄とらはるるなり」

「ケモシ」○モアブ人の信ずる神なり。故にモアブ人をケモシの民と云ふ。

30 「三〇我儕は彼らを撃たふしヘシボンを滅ぼしてデボンに及び之を荒してまたノパに及びメデバにいたる」

〔我儕〕 ○イスラエル

〔彼ら〕 ○アモリ人

〔ヘシボン〕 ○ネボ山の東北

〔メデバ〕 ○ネボ山の正東

〔デボン〕 ○ネボ山の正南

32 「三二モーセまた人を遣はしてヤゼルを窺はしめ遂にその村々を取て其處にをりしアモリ人を逐出し」

〔ヤゼル〕 ○ヘシボンの北にあるアモリ人の市邑なり。

33 「三三轉てバシヤンの路に上り往きけるにバシヤンの王オグその民を盡く率ゐて出で之を迎へてエデレイに戦はんとす」

〔バシヤン〕 ○ヨルダン川の東にしてヘルモン山よりギレアブに至る間。

〔オグ〕 ○長頸の意、巨人也。其床の長十五尺、巾六尺八寸ありしと云ふ。

〔エデレイ〕 ○堅固なる邑なり。



第二章

1 4 「かくてイスラエルの子孫ひとびとまた途みちに進みてモアブの平野に營えいを張り此はヨルダンの此旁こなたにしてエリコに對むかふニチツポルの子バラクはイスラエルが凡てアモリ人びとに爲なしたる所を見たり 三是においてモアブ人大いにイスラエルの民を懼おそるはその數多きに因よりてなりモアブ人かくイスラエルの子孫のために心をなやましたれば 四すなはちミデアンの長老等としやたちに言ふこの群衆は牛が野の草を餌食なめくらふごとくに我等の四圍まはりの物をことごとく餌食はんとすこの時にはチツポルの子バラク、モアブ人の王たり」

「モアブ」○ヨルダン川の東にして西のエリコに對する地なり。

「バラク」○モアブ人の王也。

「ミデアン」○シナイ半島にして、モーセは嘗てこゝにすめり。

5 「五彼すなはち使者つかひをベトルに遣してベオルの子バラムを招かしめんとすベトルはバラムの本國くににありて河の邊ほとりに立りその之を招かしむる言に云く茲にエジプトより出來いでし民あり地の面おほを蓋おほふて我の前にをる」

「ベトル」○ユーフラト川のほとりにある邑なり。

「バラム」○大食の意。有名なるト占者なり。

18 「八バラム答へてバラクの臣僕等しもべどもに言けるは假令たとひバラクその家に盈みるほどの金銀を我に與あたふるとも我は事の大を諷いはずわが神エホバの言を踰こへは何をも爲なすことを得ず」

○此時バラムの心は利慾に誘はければ、神は其行くに任せ給へり。されど神はバラムの行くを喜び給はざりき。

35

バラムは口には神の言葉を越えて何事をもなすことを得ずと云へども、今ロバによりて出かけたる時は、其心は名誉と利益を以て見たされたり。故に神は之を戒めたまへるなり。

〔三五〕エホバの使者バラムに言けるはこの人々とともに往け但し汝は我が汝に告る言詞のみを宣べしとバラムすなはちバラクの牧伯等とともに往り

○バラクは神に戒められたれば能く眞面目なり。

41 〔四一〕而してその翌朝にいたりバラクはバラムを伴ひこれを携へてバアルの崇邱に登りイスラエルの民の極端を望ましむ

〔バアルの崇邱〕○バアルと云ふ偶像を拝する為め設けたる高地なり。

## 第二章

1 「バラム、バラクに言けるは我ために此に七個の壇を築き此に七匹の牡牛と七匹の牡羊を備へよ」と

「バラク」○モアブ王

3 「三しか而してバラムはバラクにむかひ汝は燔祭はんさいの傍かたはらに立をれ我は往んとすエホバあるひは我に來りのぞみたまはんその我に示したまふところの事は凡てこれを汝に告んと言て一ひしつの高處たかみに登たるに」

○獨り行きてウラナヒを以て神の意をうかごふ也。我國の神おろしの如きか。

バラムは神必ず來り給ふとは信ぜず、アブラハムに比すれば大に異れり。

7 10 「七ななバラムすなはちこの歌をのべて云くモアブの王バラク、スリアより我を招き寄せ東の邦くにの山より我を招

き寄て云ふ來りて我ためにヤコブを詛のろへ來りてわがためにイスラエルを呪のろれと 八や神の詛はざる者を我いかで詛ふことを得んやエホバの呪らざる者を我いかで呪ることを得んや 九い磐の頂より我これを觀岡みおかの上より我これを望むこの民は獨り離れて居ん萬の民の中に列ぶことなからん 一〇いちじつ誰かヤコブの塵を計へ得んやイスラエルの四分一よつひじつを數ふることを能せんや願くは義人ただしきひとのごとくに我死しなん願くはわが終はつこれが終はつにひとしかれ」

○バラク第一の歌

9 「九い磐の頂より我これを觀岡みおかの上より我これを望むこの民は獨り離れて居ん萬の民の中に列ぶことなからん」

○獨りはなれてとは聖別されての意なり。

高きより望むに二百万のイスラエル天幕をはり、整然として一絲乱れず。誠に神の民の儀表也。

10 「<sup>たれ</sup>誰かヤコブの塵を計<sup>かぞ</sup>へ得<sup>え</sup>んやイスラエルの四分<sup>よっぴつ</sup>一<sup>いつ</sup>を數<sup>とく</sup>ふることを能<sup>よ</sup>せんや願<sup>ただ</sup>くは義<sup>たけ</sup>人のごとくに我<sup>しな</sup>死<sup>な</sup>ん願<sup>ただ</sup>くはわが終<sup>つひ</sup>これが終<sup>つひ</sup>にひとしかれ」

〔塵〕○子孫なり、群衆也。

〔四分一〕○イスラエル十二族を四分せる故也。四分の一すら計ふるを得ずと云ふ也。

〔これが〕○義人の

13 「<sup>三</sup>バラクこれに言けるは請<sup>こ</sup>ふ汝<sup>なん</sup>われととも<sup>も</sup>に他の處<sup>とほ</sup>に來<sup>き</sup>りて其處<sup>そこ</sup>より彼<sup>か</sup>らを觀<sup>み</sup>よ汝<sup>なん</sup>ただ彼<sup>か</sup>らの極<sup>は</sup>端<sup>し</sup>のみを觀<sup>み</sup>ん彼<sup>か</sup>らを全<sup>ぜん</sup>くは觀<sup>かん</sup>ことを得<sup>え</sup>ざるべし請<sup>こ</sup>ふ其處<sup>そこ</sup>にて我<sup>われ</sup>ために彼<sup>か</sup>らを詛<sup>のろ</sup>へと」

○汝イスラエルの全衆を見て恐れたり乞ふ。其一部分を見て之を呪へと。

全体を呪うことを得ずんば、其一部分にてものろへと。

14 「<sup>四</sup>やがて之を導きてピスガの嶺<sup>のみ</sup>なる斥<sup>も</sup>候<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>に至<sup>いた</sup>り七箇<sup>しち</sup>の壇<sup>のみ</sup>を築<sup>た</sup>きて壇<sup>のみ</sup>ごとに牡牛<sup>うし</sup>一<sup>ひと</sup>匹<sup>びつ</sup>と牡羊<sup>ひつ</sup>一<sup>ひと</sup>匹<sup>びつ</sup>を獻<sup>けん</sup>たり」

〔ピスガ〕○アバリム山の峰也。

19 「<sup>九</sup>神<sup>かみ</sup>は人のごとく誑<sup>いつは</sup>ること无<sup>な</sup>しまた人の子<sup>こ</sup>のごとく悔<sup>く</sup>ふこと有<sup>あ</sup>らずその言<sup>こと</sup>ところは之<sup>これ</sup>を行<sup>お</sup>はざらんやその語<sup>こと</sup>るところは之<sup>これ</sup>を成就<sup>な</sup>せざらんや」

〔人の子のごとく〕○前に云へるを

20 「<sup>二〇</sup>我<sup>われ</sup>はこれのために福祉<sup>さいわひ</sup>をいのれとの命<sup>いのち</sup>令<sup>めい</sup>を受<sup>う</sup>く既に之<sup>これ</sup>に福祉<sup>さいわひ</sup>をたまへば我<sup>われ</sup>これを變<sup>か</sup>るあたはざるなり」

○全体を見るも一部分を見るも異なることなし。神はまたキリスト者を聖別し、之を愛し、之を導き給ふ。キリ

ストの寶血を以て之を贖ひたまへり。

「これがため」○イスラエル

21 「三」エホバ、ヤコブの中に悪き事あるを見ずイスラエルの中に憂患あるを見ずその神エホバこれとともに在し王を喜びて呼はる聲その中にあり」

○神を王とし勝鬨をあげて勇み奮ふ也。

23 「三」ヤコブには魔術なしイスラエルには占卜あらず神はその爲どころをその時にヤコブに告げイスラエルにしめたまふなり」

○まはり遠く神意を伺はず、直ちに紙に聞く也。

24 「二」觀よこの民は牝獅子のごとくに起あがり牡獅子のごとくに身を興さんはその攫得たる物を食ひその殺し物の血を飲では臥ことを爲じ」

○将来の運命を云ふ。

25 「五」是においてバラクはバラムに向ひ汝かれらを誣ふことをも祝することをも爲なかれと言けるに」

27 「七」バラクまたバラムに言けるは請ふ來れ我なんぢを他の處に導き往ん神あるひは汝が其處より彼らを我ために誣ふことを善とせんと」

○バラクは如何にしても其目的を達せんと欲す。  
イスラエルを正面より望み側面より望む。

28

「<sup>二</sup>八バラクすなはちバラムを導きて曠野あらのに對するペオルの嶺いただきに至るに」  
「ペオル」○ネボ山の北なり。ベテペオルとも云ふ。

第二章

3 9 「<sup>三</sup>彼すなはちこの歌をのべて云くベオルの子バラム言ふ目の啓きたる人言ふ <sup>四</sup>神の言詞を聞き者能はざる無き者をまぼろしに觀し者倒れ臥て其目の啓けたる者言ふ <sup>五</sup>ヤコブよ汝の天幕は美しき哉イスラエルよ汝の住所は美しき哉 <sup>六</sup>是は谷々のごとくに布列ね河邊の園のごとくエホバの栽し沈香樹のごとく水の邊の香柏のごとし <sup>七</sup>その桶よりは水溢れんその種は水の邊に發育んその王はアガグよりも高くなりその國は振ひ興らん <sup>八</sup>神これをエジプトより導き出せり是は強きこと咒のごとくその敵なる國々の民を吞つくしその骨を摧き矢をもて之を衝とほさん <sup>九</sup>是は牡獅子のごとくに身をかがめ牡獅子のごとくに臥す誰か敢てこれを起さんやなんぢを祝するものは福祉を得なんぢをのろふものは災禍をかうむるべし」

○バラム第三のうた

4 「<sup>四</sup>神の言詞を聞き者能はざる無き者をまぼろしに觀し者倒れ臥て其目の啓けたる者言ふ」

「能はざる無き者」 ○神

「目の啓けたる」 ○靈の目のひらけたる也。

6 「<sup>六</sup>是は谷々のごとくに布列ね河邊の園のごとくエホバの栽し沈香樹のごとく水の邊の香柏のごとし」

○勢まき也。

7 「<sup>七</sup>その桶よりは水溢れんその種は水の邊に發育んその王はアガグよりも高くなりその國は振ひ興らん」

「アガグ」 ○焰の意にてアマレクの王号也。

9 「九是は牡獅子のごとくに身をかがめ牡獅子のごとくに臥す誰か敢てこれを起さんやなんちを祝するものは福祉を得なんちをのろふものは災禍をかうむるべし」

「起さんや」 ○怒らす

「なんち」 ○イスラエル

15 〵 19 「二五すなはちこの歌をのべて云くベオルの子バラム言ふ目の啓きたる人言ふ 一六神の言を聞るあり至高者を  
 知の知識あり能はざる無き者をまぼろしに觀倒れ臥て其目の啓けたる者言ふ 一七我これを見ん然ど今にあらざ  
 我これを望まん然ど近くはあらざヤコブより一箇の星いでんイスラエルより一條の杖おこりモアブを此旁より  
 彼旁に至まで撃破りまた鼓譟者どもを盡く滅すべし 一八其敵なるエドムは是が産業となりセイルは之が産業と  
 ならんイスラエルは盛になるべし 一九權を秉る者ヤコブより出で遣れる者等を城より滅し絶ん」

○バラム第四のうた

17 「二七我これを見ん然ど今にあらざ我これを望まん然ど近くはあらざヤコブより一箇の星いでんイスラエルより  
 一條の杖おこりモアブを此旁より彼旁に至まで撃破りまた鼓譟者どもを盡く滅すべし」

○イスラエルの内よりイエスの生るゝを預言す。イスラエル人は最初にアマレクと戦へり（出一七8）。

○我（イエス）は輝くあけの明星なり。

「一箇の星」 ○イエス

「一條の杖」 ○王

18 「二八其敵なるエドムは是が産業となりセイルは之が産業とならんイスラエルは盛になるべし」



「ゼイル」○死海の南にしてエドム人の住む所也。

20 〔二〕○ベラム又アマレクを望みこの歌をのべて云くアマレクは國々の中の最初なる者なり其終には滅び絶るに至らん 二 亦ケニ人を望みこの歌をのべて云く汝の住所は堅固なり汝は磐に巢をつくる 三 然どカインは亡て終にアッスリアの爲に擄へ移されん 二 三 彼亦この歌をのべて云く嗟神これを爲たまはん時は誰か生ることを得ん 二 四 キツテムの方より船來てアッスリアを攻なやましエベルを攻なやますべし而して是もまた終に亡失ん〕

○ベラム第五のうた

21 〔三〕亦ケニ人を望みこの歌をのべて云く汝の住所は堅固なり汝は磐に巢をつくる〕

〔ケニ人〕

○紅海の東パレスチナとシナイ山との間に住める民にして、モーセの妻の父エテロは其家族なり。

22 〔三〕然どカインは亡て終にアッスリアの爲に擄へ移されん〕

〔カイン〕○英訳にはケニとあり。

24 〔二〕四 キツテムの方より船來てアッスリアを攻なやましエベルを攻なやますべし而して是もまた終に亡失ん〕

〔キツテム〕○地中海のクプロ又キプロスと云ふ島なり。

〔エベル〕

○セムの子孫なり。イスラエルの先祖にしてエベルよりヘブルと云ふ名出づ。アブラハムをヘブル人といへり（創一四13）。

第二章

1 「イスラエルはシツテムに止まり居けるがその民モアブの婦女等と姪をおこなふことを始めたり」

○バラムの計略によれり。バアルペオルは猥なる偶像なり。毎に戦地に行はるゝ悲劇。  
「シツテム」

○ねむの木の意。ねむの木茂り土地肥えたり。

モアブ山とヨルダン川との仲間に在り。

3 「イスラエルかくバアルペオルに附ければイスラエルにむかひてエホバ怒を發したまへり」

○神はねたみの神也。

6 「モーセとイスラエルの子孫の全會衆集合の幕屋の門にて哭をる時一箇のイスラエル人ミデアンの婦人一箇を携きたり彼らの目の前にてその兄弟等の中に至れり」

○一はまじめにして悲み、一は不まじめにして戯る。

13 「三即ち彼とその後の子孫永く祭司の職を得べし是は彼その神のために熱心にしてイスラエルの子孫のために贖をなしたればなり」

○ピネハスの為に他の人々救はれたり。

14 「四その殺されしイスラエル人すなはちミデアンの婦人とともに殺されし者はその名をジムリと言てサルの子にしてシメオン人の宗族の牧伯の一人なり」

○モアブ人とミデアン人は協力してイスラエルを欺かんとせる也。

未信者の配偶を得て信仰をすてたる人多し。注意せざるべからず。

「ミデアン」 ○遙に南の地

「シメオン」 ○ヤコブの第二男なり。

第二十六章

○新たに戦争をひらかんとす。先づ味方を整備する必要あり。敵を知り己れを知れば百戦百勝と。  
民数紀略一章と比較。

- 7 「<sup>ル</sup>ルベンの宗族は是のごとくにしてその核數<sup>かぞへ</sup>られし者は四萬三千七百三十人」  
〔四萬三千七百三十人〕○四万六千五百人
- 14 「<sup>シメオン</sup>シメオン人の宗族は是の如くにして其數られし者は二萬二千二百人」  
〔二萬二千二百人〕○五万九千三百人
- 18 「<sup>ハガド</sup>ハガドの宗族は是のごとくにしてその核數られし者は四萬五百人」  
〔四萬五百人〕○四万五千六百五十人
- 22 「<sup>ユダ</sup>ユダの宗族は是のごとくにしてその核數られし者は七萬六千五百人」  
〔七萬六千五百人〕○七万四千六百人
- 25 「<sup>イスサカル</sup>イスサカル人の宗族は是のごとくにしてその數へられし者は六萬四千三百人」  
〔六萬四千三百人〕○五万四千四百人
- 27 「<sup>ゼブルン</sup>ゼブルン人の宗族は是のごとくにしてその核數られし者は六萬五百人」  
〔六萬五百人〕○五万七千四百人

- 34 「<sup>三四</sup>マナセの宗族は是のごとくにしてその核數られし者は五萬二千七百人」  
「五萬二千七百人」○三萬二千二百人
- 37 「<sup>三七</sup>エフライムの子孫の宗族は是のごとくにしてその核數られし者は三萬二千五百人 ヨセフの子孫はその宗族に依は是のごとし」  
「三萬二千五百人」○四萬五百人
- 41 「<sup>四一</sup>ベニヤミンの子孫は其の宗族に依は是のごとくにしてその核數られし者は四萬五千六百人」  
「四萬五千六百人」○三萬五千四百人
- 43 「<sup>四三</sup>シユハム人の諸の族の中核數られし者は六萬四千四百人」  
「六萬四千四百人」○六萬二千七百人
- 47 「<sup>四七</sup>アセルの子孫の宗族は是のごとくにしてその核數られし者は五萬三千四百人」  
「五萬三千四百人」○四萬一千五百人
- 50 「<sup>五〇</sup>ナフタリの宗族は其の宗族によればかくのごとくにしてその核數られしものは四萬五千四百人」  
「四萬五千四百人」○五萬三千四百人
- 51 「<sup>五一</sup>すなはちイスラエルの子孫の核數られし者は六十萬一千七百三十人なりき」  
「六十萬一千七百三十人」○六十萬三千五百五十人
- 65 「<sup>六五</sup>其はエホバ會かつて彼らの事を宣のべて是はかならず曠野あらのに死しなんといひたまはればなり是をもてエフンネの子カルブとヌンの子ヨシユアの外は一人も遺れる者あらざりき」

「カルブとヨシユア」○十二人にてカナン地をうかゞひ帰りし勇士なり。

第二十七章

1 「茲にヨセフの子マナセの族やからの中なるへペルの子ゼロペハデの女子等むすめどもきたれり へペルはギレアデの子ギレア

デはマキルの子マキルはマナセの子なりその女子等の名はマアラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザといふ」

「マアラ」○書ヨシ十七章にはマアラはマヘラとあり。

3 4 「我等の父は曠野に死り彼はかのコラに與して集りてエホバに逆ひし者等の中に加はらず自己の罪に死り然るに男子なし 四 我らの父の名なんぞその男子をしのひあらざるがためにその族の中より削らるることある可べんや我らの父の兄弟の中において我らにも産業さんげふを興あたへよと」

○民一六 1 2

○人に死ノ来ルハ罪ノ結果ナリトノ古ヨリノ考ニヨル。時に未ダ受クベキ産業ナシ。

されどゼロペハデの女の子供等其権利を主張せざりしならば、カナンの地に入る暁にも産業を得ること能はざりしなるべし。

男子にある権利は女子にも在るべし。併しすべての事男子女子其形式を同一にすべしと云ふには非ず。婦人が男子と其赴をことにすべきはテモテ前書二 9 以下参照。

12 「茲にエホバ、モーセに言たまはく汝このアバリム山さんにのぼり我イスラエルの子孫ひとびとに與へし地を觀よ」

「アバリム山」

○死海の東。死海を抜くこと四千尺。而して死海の水面は地中海の水面より一千三百尺低し。ヨルダン川は凡

六十里。

目的とするカナンの地は面積六千六百万方哩。吾四国より稍小なり。最も膨張せるソロモン王の時は六百万方哩に達せるも北海道の二倍に達せざりき。

14 「<sup>四</sup>是チンの曠野において會衆の爭論をなせる砌に汝らわが命に慄りかの水の側にて我の聖き事をかれらの目のまへに顯すことを爲ざりしが故なり是すなはちチンの曠野のカデシにあるメリバの水なり」

○民二〇 12

○モーセは神の御取計を甘受し、其同胞の前途を心配せり。

21 「<sup>二</sup>彼は祭司エレアザルの前に立べしエレアザルはウリムをもて彼のためにエホバの前に問ことを爲べしヨシユアとイスラエルの子孫すなはちその全會衆はエレアザルの言にしたがひて出でエレアザルの言にしたがひて入べし」

○サムエル前一四41、ギリシア訳によれば、罪若し我にあるか、我子ヨナタンに在らば、ウリムを与へよ。罪若し民に在らばトンミムを与へよ。

汝さばきのムネアテにウリムとトンミムとを入れ、アロンをしてエホバの前に入る時に之を其心の上に置きむべし（出二八30）。



第三章

1 「ルベンの子孫とガドの子孫は甚だ多くの家畜の群を有り彼等ヤゼルの地とギレアデの地を觀るにその處は家畜に適き所なりければ」

「ルベン」○ヤコブの長子

「ガド」○第七子

「ヤゼル」○ヨルダン川の東、死海の北

3 「アタロテ、デボン、ヤゼル、ニムラ、ヘシボン、エレアレ、シバム、ネボ、ベオン」

「シバム」○ヘシボンの近傍

8 「汝らの先祖等も我がカデシバルネアより其地を觀に遣せし時に然なせり」

「カデシバルネア」○パランの荒野

12 「三第ケナズ人エフンネの子カルブとヌンの子ヨシユアとを除く此二人はエホバに全く従ひたればなり」

○エホバに全く従ふ者となることを得しめ給へ。それ召さるゝ者は多し、救はるゝ者は少なし。

17 「七然ど我らはイスラエルの子孫をその處に導きゆくまでは身をよるひて之が前に奮ひ進まん第われらの少者はこの國に住る者等のために堅固なる邑に居ざるを得ず」

○与へられんことを願はゞ先づ与へざるべからず。天は自ら助くる者を助くと云ふに非ずや。勇ましかれ、陣頭に進む者となれ。

24 「<sup>四</sup>汝らその少者のために邑を建ててその羊のために<sup>五</sup>圈を建よ而して汝らの口より<sup>六</sup>出せるところを爲せ」

○云ふ者となる勿れ、行ふ者となれ。

28 「<sup>一</sup>八是においてモーセかれらの爲に<sup>二</sup>祭司エレアザルとヌンの子ヨシユアとイスラエルの<sup>三</sup>支派の族長等に命ずる事ありき」

○モーセは遠からず死ぬべきことを思ひてかく遺言せしなり。

32 「<sup>一</sup>我らは身をよろひてエホバの前にカナンの地に<sup>二</sup>濟りゆきヨルダンの<sup>三</sup>此旁なる我らの産業を保つことを爲べし」  
○個人の利益も重んずべし。されど公共の利益も重んずべし。己れのみを愛すべからず。社會の爲に奉仕せざるべからず。義塾の後援會出来得ば喜ぶべきなり。

第三章

○人々神より多くの恵を得る者となれ。

されど人若し全世界を得るとも其生命を失はざ何の益あらん乎（太一六26）。  
生命は失はざれ。

第三章

1 「エリコに對するヨルダンの邊なるモアブの平野においてエホバ、モーセに告て言たまはく」  
 「エリコ」

○ヨルダン川より西へ五哩、死海より北へ六哩、エルサレムより東へ五哩離れたる肥沃の地にある都邑なり。

2 「イスラエルの子孫に命じてその獲たる産業の中よりレビ人に住べき邑々を與へしめよ汝らまたその邑々の周圍に郊地をつけてレビ人に與ふべし」  
 「レビ人」

○ヤコブの三男なるレビの子孫。其内祭司アロンの一家をのぞく。

レビ人は他の氏族の如く廣き土地を所有せず。只十二の氏族の中に散在したる四十八の市邑と其周圍凡五町程の地面を持てり。

4 「汝らがレビ人に與ふる邑々の郊地は邑の石垣より外四周一千キュビトなるべし」

「一千キュビト」○五町弱

11 「汝らのために邑を設けて逃遁邑と爲し誤りて人を殺せる者をして其處に逃るべからしむべし」

○殺されたる者の親類家族が復仇するを避くるなり。米国に今もリンチあり。未開の風習と云ふべし。吾等の逃遁場はイエスにあり。罪人の涙を天秤にせるに、其悔悛の涙は罪を贖ひ得てあまりありし話あり。

28 「其は彼は祭司の長の死るまでその逃遁邑に居べき者なればなり祭司の長の死たる後はその人を殺せし者お

のれの産業の地にかへることを得べし」

○今日の法律にも時効と云ふことあり。

33

「<sup>三三</sup>汝らその居<sup>をる</sup>ところの地を汚<sup>けが</sup>すべからず血は地を汚すなり地の上に流せる血は之を流せる者の血をもてするに非<sup>あつた</sup>れば贖<sup>あつた</sup>ふことを得<sup>え</sup>ざるなり」

○キリストは我等の代表者として我等の為に其尊き血を流し給へり。

目にて目をつくのみ、齒にて齒をつくのへとあるは汝等のきゝし所也。されど我れ汝等に告げん、惡に敵する勿れ（太五38）。

34

「<sup>三四</sup>汝らその住<sup>すむ</sup>ところの地すなはち我が居ところの地を汚すなかれ其は我<sup>われ</sup>エホバ、イスラエルの子孫<sup>ひとびと</sup>の中に居ばなり」

○天を指して誓ふ勿れ。天は神の御位なればなり。地を指して誓ふ勿れ。地は神の足臺なればなり（太五34）。

第三六章

2 「二言けるはイスラエルの子孫ひしびとにその産業の地を鬪くによりて與ふことをエホバわが主に命じたまへり吾主またわれらの兄弟ゼロベハデの産業をその女子等に與ふべしとエホバに命ぜられたまふ」

「わが」 ○モーセ

4 「四而して彼らの産業はイスラエルの子孫のヨベルに至りてその適ゆげる支派わかれの産業に加はるべし斯かれらの産業は我らの父祖の支派の産業の中より除去ひきしられん」

「ヨベル」 ○安息の年なり

6 「六ゼロベハデの女子等の事につきてエホバの命じたまふところは是のごとし云く彼らはその心に適かなふ者に嫁ぐべけれど惟ただその父祖の支派の家にのみ嫁ぐべし」

○ヨセフ—マナセ—マキル—ギレアデ—ヘペル—ゼロベハデ—女子

8 「八イスラエルの子孫の支派の中凡そ産業を有る女は皆おのれの父の支派の家に嫁ぐべし然しかせばイスラエルの子孫おのおのその父祖の産業を保つことを得ん」

○持参金つきのよめ

12 「二彼らはヨセフの子マナセの子等こどもの家に嫁ぎたればその産業はその父の族やからの支派に止とどまれり」

○イスラエル人の社會組織

○モーセは約束の地を望み終に之に入る能はずして死ねり。預言者は皆メシヤの王国を望みながら其栄光をう

たひ、其到来を望みながら之を見ること能はずして死ねり。

○全世界を其住民に公平に分つの時来るべし。即ち全世界のヨベルの年、今日のロシヤの有様は未だ其会談に過ぎず。されど彼等の理想とする所は此にあり。